

血液培養検査を 受けられる患者さんへ

監修：志馬 伸朗 先生 広島大学大学院 救急集中治療医学 教授



血液培養検査とは

ひとの血液のなかには、常に無菌の状態に保たれており、微生物は存在しません。しかし、なんらかの理由によって血液中に微生物が侵入し体中を駆け回ることがあり、この状態を菌血症きんけつしょうといいます。これは、生体にとっては異常事態であり、患者さんには発熱、悪寒、ふるえ、あるいは意識の変化や気分の不調など様々な症状が急激に現れます。このときは、血液を採取し、特殊なボトルに注入した上で孵卵器ふらんきのようなもので菌を増やすこと（培養といいます）により、原因となった微生物が何かを確かめます。これを、血液培養検査といいます。



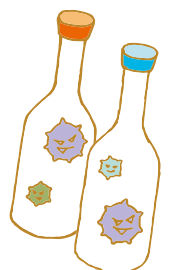
血液培養検査は菌血症を確定診断するために行う検査法です。

菌血症のときは、上記の症状が急速に現れるだけではなく、血圧が低下したり、尿が出なくなるなど、体のさまざまな臓器の働きに重大な影響が現れるとても重い病態を伴うので、できるだけ早く菌を殺す薬剤（抗菌薬、抗真菌薬など）で治療をはじめする必要があります。この薬剤が、正しいもの（適切に菌を殺すことができるもの）であるかどうかを判断するために、血液培養検査を行う必要があるのです。



検査中のお願い

血液中に紛れ込んだ原因菌は、とても少ない数しかいませんので、十分な量の血液を確保しなければ捕まえることができません。そのため、血液培養検査では、普段の採血より多い量の血液を採取します。一般的に成人では20mLを採取し、2本のボトルに分けて注入します。小児では、体重により異なりますが、乳児で最低1mL、幼児で3mL程度を目標にします。ひとの皮膚にはたくさんの常在菌（皮膚の上に住んでいて普段は皮膚を守ってくれるおとなしい菌）が住んでいます。それらの菌による影響を取り除くため、時間をかけて皮膚の消毒を行う必要があります。また、原因菌の正体を正しく突き止めるために、左右の腕など違う場所から2回以上採血をします。





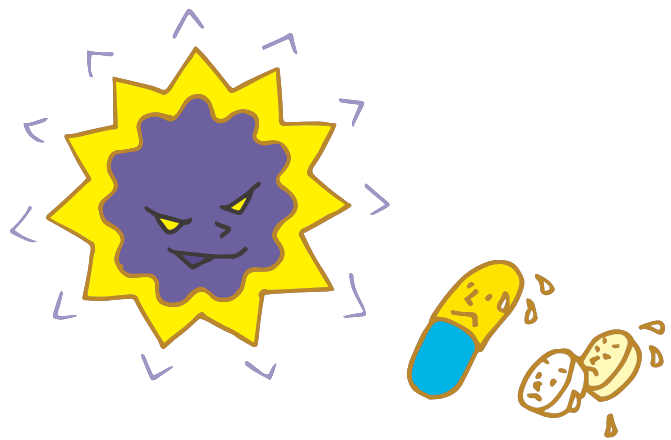
どうして、 正しい抗菌薬を使用する 必要があるのですか？

いま、世界的に抗菌薬などが効きにくい菌（薬剤耐性菌）の問題が注目されています。厚生労働省では、薬剤耐性を食い止めるための対策を講じており、ホームページでもその内容がご覧頂けます。

薬剤耐性菌が生まれる背景には、抗菌薬などの過剰使用があります。例えば、普通の風邪に対する抗菌薬の処方や、幅広く色々な菌に効く薬剤（広域抗菌薬）の長期使用などがあげられます。

どんな菌によってあなたの体の調子が悪いのかを調べ、その菌に一番よく効く、できるだけ狭域（広域の反対で、比較的限定された菌のみに有効な薬剤）の薬

剤を処方するための一つの重要な手段として、血液培養検査を行う意義があるのです。適切な血液培養検査は、薬剤耐性菌を減らすことにもつながる重要な検査になります。



【薬剤耐性（AMR）対策について/厚生労働省】

<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000120172.html>

日本ベクトン・ディッキンソン株式会社
本社：〒107-0052 東京都港区赤坂4-15-1 赤坂ガーデンシティ

bd.com/jp/



© 2017 BD. BD、BDロゴおよびその他の商標はBecton, Dickinson and Companyが所有します。
49-104-00 R0-1710